

『しあわせの宗教学—ウェルビーイング研究の視座から—』  
櫻井義秀 (編) 法蔵館、2018年

おやさと研究所教授  
金子 昭 Akira Kaneko

本書は、11名の共著者(対談者を含む)による、宗教と幸せをめぐる多角的アプローチである。編者の櫻井義秀は、ウェルビーイングの国際比較から日本人の幸福感の特徴を概観した第1章を担当し、これに続く各章は個別テーマを扱うと述べている。ウェルビーイングとは「健康とは身体的・精神的及び社会的に良好な状態 well-being を指す」という定義に由来するが、櫻井はこれを幸せに近似する概念(広義の幸せ)として捉え、主観的な幸福感に限定するときは幸せ感 happiness を用いている。

日本はGDPが世界第3位、また社会保障も整備されて、幸福の客観的指標は高いにもかかわらず、なぜか主観的幸福感が低いのが特徴である。理由として、高齢化が健康認知を下げていることや介護の問題、非正規雇用や労働ストレス増加、人口減少などによる地方の衰退、社会的格差の増大による諦め感、ネット社会により自覚された相対的剥奪感の増加を指摘している。これは韓国も同様の傾向を示している。

ただ、実際に幸福と宗教を論じるとなると、櫻井による上記の二分法では取まりきれないものがある。幸福それ自体が多義的な概念であり、さらに幸福と宗教との関わりもまた多様なのである。宗教が人に幸せをもたらしてくれるのか、それとも宗教を信じることで自分が幸せなのか、この考えの違いだけで論点は大きく変わってこよう。本書全体を通じて、幸福概念は幸せ、しあわせ、幸福感、幸福観……と、含意の微妙な差異を織りなして取り上げられている。また幸福とは何かと論じることは、その逆の不幸とは何かを暗に語るものでもあり、本書の論述からは不幸と宗教の関わりをも読み取ることができるかもしれない。

本書は第2章～第9章及び「対談」と「付録」からなるが、とくに本章部分は各論というには内容的な独立性があり、また論としての自己主張性も強い。そのためなのだろうか、目次や各省の扉に章番号が章題に付されていない。各章を評者なりに関連づけて述べるとすれば、次のようになろう。

まず、ウェルビーイングの国際比較から説き起こした第1章(櫻井義秀)を、国際比較のみならず日本国内の地域・性別・学歴・婚姻状況・雇用形態等から、詳しい客観的データで裏付けするのは「付録」(清水香基)である。地域づくりのスピリチュアルな背景をなす神社について論じた第4章(板井正斉)、また地域に開かれた寺院の次世代養成活動の事例紹介である第8章(稲本琢仙)は、地域に住む不特定多数への宗教のスピリチュアルな潜在力を扱っている。その一方で、キリスト教の教会員たちが共同で教会と信仰を支えあう事例を取り上げた第3章(川又俊則)、また創価学会の会員たちの共同体のジェンダー規範と信仰継承を扱う第6章(猪瀬優理)は、信仰共同体の存続が宗教による幸せを紡ぐ姿を示している。同じ宗教的幸福であっても、伝統宗教による多数者に開かれたありよう(第4・8章)と、宗教教団内での人々との共同的つながり(第3・6章)とでは、印象がずいぶん異なるものだ。

また、「ポストモダン高齢者」(団塊の世代の人々)の死生観と尊厳死観について論じた第5章(片桐資津子)、社会の中で孤立し、さまざまな生きづらさを抱える人々への傾聴ボラン

ティアを取り上げた第7章(横山忠範)は、広く社会の人々の苦悩に積極的に向き合う宗教性、あるいはスピリチュアルなものの可能性を示唆している。第5・7章に関連して、自死予防に取り組む現役僧侶との「対談」(櫻井義秀・袴田俊英)は、「おひとり様」時代における現代仏教の諸課題を具体的に提示していて興味深い。

異色なのは、ユング派に依拠しながら英雄神話が心理臨床面に及ぼす「しあわせ」について論じた第2章(平藤喜久子)、そしてセウォル号沈没事故をめぐる韓国宗教の相反する関わりを取り上げた第9章(李賢京)である。とくに第9章は、宗教と社会との関わりが韓国では日本以上に鋭角的に現れることを如実に示す内容だ。

韓国人は、セウォル号の惨事を「宗教的災難」としても記憶しているという。セウォル号の乗組員の9割は、かつて集団自殺事件を起こしたキリスト教系宗教の信徒であった。また、当時の朴槿恵大統領が事故対応に遅れを取った理由に、彼女がある新興宗教の儀礼に参加していたのではないかと疑われている。その一方、四大宗教(仏教、カトリック、プロテスタント、円仏教)をはじめとして、事故発生から直ちに救援・支援を開始し、今もなお死者の追悼や遺族への心のケアなどを継続している宗教も存在する。諸宗教によるさまざまな活動は、東日本大震災における日本の宗教の動きにも重なるものが多くあろう。

宗教は本当に人を幸せにしてくれるのか? 本書は読者をしておおいに考えさせてくれることであろう。

- 【目次】\* 本書には章番号は付されていない。  
 [第1章] 日本人の幸福感と宗教 (櫻井義秀)  
 [第2章] しあわせの神話学—英雄が運ぶしあわせ (平藤喜久子)  
 [第3章] 信仰を支えあう幸せ—「協働」牧会による多世代地域間交流 (川又俊則)  
 [第4章] 若者の地方移住に神社が創り出す新たな「しあわせ」観 (板井正斉)  
 [第5章] 尊厳死は幸せな最期につながるか (片桐資津子)  
 [第6章] 「幸せ」をつなぐ—宗教にみるジェンダーとケイパビリティ (猪瀬優理)  
 [第7章] 孤立化社会における傾聴ボランティアの役割—止まり木と順送りの互助 (横山忠範)  
 [第8章] 寺院は子どもの成長をどう助けられるか (稲本琢仙)  
 [第9章] 宗教は韓国人を幸せにするのか—「セウォル号沈没事故」を手がかりに (李賢京)  
 【対談】人口減少時代における仏教の役割 (櫻井義秀・袴田俊英)  
 【付録】幸福感に関する調査とデータ (清水香基)

